様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５１２７３

研究課題名（和文）発展途上国における教育と保健を統合した新たな国際開発研究の展開

研究課題名（英文）Advancing New International Development Studies through Integrating Education with Health in Developing Countries

研究代表者
澤村　信英（SAWAMURA, Nobuhide）

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：３０２９４５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：教育と保健は、国際開発の中心的課題であり、人びとの生活でこの二分野は密接に関連している。本研究では、これまで別々に行われていた両分野の研究を統合し、共同でフィールド調査を行い、結果の提示や考察を学際的に行った。インタビューに基づく家計調査により、どのような観点から教育と保健を人々が捉えているのか、個々の生活の中で教育と保健がどのような位置にあり、干渉しているのか、その理由や背景を解明した。この成果は、国際開発研究上の意義があることに加え、開発課題に対する実践的な面での価値もある。

研究成果の概要（英文）：Education and health are two major issues in international development and both are closely related in people’s lives. Notwithstanding, it has been rare for researchers in the two fields to work closely together. However, in this research project, we discussed these issues utilizing an interdisciplinary approach, conducting fieldwork and producing research outputs jointly. It was revealed how people categorize education and health matters in their lives, the contexts in which they understand them and how the two influence each other. Each research finding makes a valuable contribution towards development issues, as well as having an impact on international development studies.

研究分野：比較国際教育学

キーワード：国際開発学　教育学　保健学　発展途上国　地域研究

１．研究開始当初の背景

国連で 2000 年に合意した「ミレニアム開発目標」には８つのゴールが設定されている。この特徴は、そのほとんどが教育と保健に密接に関係していることである。例えば、ゴール２：初等教育の完全普及、ゴール 3：ジェンダーの平等、ゴール４：乳幼児死亡率の削減、ゴール５：妊産婦の健康の改善、である。要すれば、世界の開発課題を解決するには、教育と保健の両面からの生活改善が特に重要になるということである。

したがって、教育と保健の各分野では、膨大な量の調査研究が発展途上国において実施されてきた。計量的な分析においては、母親の教育歴と子どもの健康の関係など、両者に相関関係があることが実証されている。しかし、個々の家庭において、この両者がどのような関係性にあるのか、現実の生活レベルでは必ずしも解明されておらず、そのための質的な調査が不足している。この背景には、発展途上国の開発の諸問題に関する研究は援助機関の主導で行われ、関連する部門の現状分析や課題の特定が目的として実施され、家庭での保護者や子どもの視点からみた、生活世界を意識した丁寧な研究があまり行われてこなかったことがある。

２．研究の目的

教育と保健を専門とする研究者が同一のチームで行動する場合、別々に調査し、別々の論文を書くのが通例である。本研究においては、共同でフィールドワークを実施し、共著での論文執筆を行うという、真の意味での「統合」を目標にする。例えば、特定の家族に焦点を絞り、どのような観点から教育と保健を彼らは捉えているのか、インタビューに基づく家計調査により、この両者を並行して深く調査できれば、個々の生活の中で教育と保健がどのような位置にあり、干渉しているのか（あるいは相互補完的な関係にあるのか、干渉し合わないのかなど）、その理由や背景は何なのかが解明できる。この成果は、国際開発研究上の新たな展開として意義があることに加え、開発課題に対する実践的な面での価値もある。

３．研究の方法

フィールドワークを基礎とする事例研究を中心とし、半構造化インタビューおよび参与観察を行う。生活世界に密着し、教育や保健といった既存の学問的ディシプリンにとらわれることなく、地域研究的なアプローチも参考にする。ライフヒストリーやエスノグラフィーの要素も取り入れる。データ分析の基本部分は極力現地で行い、現地共同研究者を交えて基礎的な考察を行う。

４．研究成果

教育と保健は、国際開発の中心的課題であり、人びとの生活でこの二分野は密接に関連している。本研究では、これまで別々に行われていた両分野の研究を統合し、共同でフィールド調査を行い、結果の提示や考察を学際的に行った。インタビューに基づく家計調査により、どのような観点から教育と保健を人々が捉えているのか、個々の生活の中で教育と保健がどのような位置にあり、干渉しているのか、その理由や背景を解明した。この成果は、国際開発研究上の意義があることに加え、開発課題に対する実践的な面での価値もある。

なかでも、特筆すべき成果は、比較的に現在も伝統的生活を送ることの多いマサイ女性にとって、初等学校修了（あるいは中退）がその後の人生にいかなる影響があったのか、特に保健医療面について、教師およびマサイ女性自身から行った聞き取り調査結果である。主な対象は、教師 14 人（男 6 人、女 8 人）、就学経験のあるマサイ女性 6 人である。補足的に、地区の教育行政官 1 人（20 公立小学校、3 私立小学校、1 公立中等学校を所掌）にも聞き取りを行った。教師の年齢は 20 歳代から 50 歳代までさまざまであるが、エスニシティはマサイとキクユである。もう一方のマサイ女性の年齢は 20 歳代前半から 40 歳代までの広がりがあり、いずれも 20 歳前に結婚し、小学校卒業（あるいは中退）後、7～27 年が経過している。

(1) 教師

教師の経験からみた就学経験者と不就学者の違いは、次の①～⑰のとおりである。①服装や毛髪（特に子どもの）、家が清潔である、②思考の仕方が違う、他人と議論できる、自己表現できる、③幅広い（深い）考え方ができるだけの知識と経験がある、④礼儀を知っている、自己を律することができる、⑤健康、衛生的な生活ができる（病院、トイレ、水）、⑥栄養的にバランスのある食事ができる、⑦時間管理や計画が可能になり、仕事を効率的にできる、⑧他人と適切な関係を構築し、コミュニケーションができる、⑨夫に依存せず独立して物事ができる、夫を恐れない、⑩読み書きができ、薬の処方なども理解できる、⑪資産の管理や運用が可能となり家計を任される、⑫子どもの教育や学校の運営に理解を持つ、⑬家族計画をする、多くの子どもを望まない、⑭家族（特に子ども）の世話をうまくできる、⑮夫を管理して、助言も拒絶もできる、⑯ビジネスに関心を持つ、店で物を売る、⑰第二夫人にならない。

このインタビュー結果は、民族性による違いよりも、マサイの人びと生活を共有する期間の長短、マサイの子どもの教育へのコミットメントの高低により聞き取れる内容が量と質で異なっている。例えば、民族としてはキクユであってもマサイランドで生まれ育ったような教師は、マサイの教師以上に地域の現状をよく把握し、理解が深い。

教師の学校教育に対する期待値が高いこ

ともあるが、小学校で学習経験があるか否かでの差については、全員がかなりの違いがあるという回答で一致している。ただし、これは日常生活での差異であり、就職するには初等教育だけでは不十分でほとんど役に立っていないともしている。また、学校教育を受けた女性は、コミュニティの中で受けなかった女性に影響を与え、受けなかった女性は受けた女性の真似をしようとする、という意見も複数の教師から聞かれた。

このような違いが現れる理由として、頻繁に共通して使われ単語は、エクスポージャー（exposure）とインタラクション（interaction）の２つである。前者は新しい世界（新しい知識や考え方、場所）へのエクスポージャーであり、後者は生徒や教師、友人などとのインタラクションを通して、学びが生じるということである。換言すれば、前者は教科内容などから得られるものであるし、後者は学校という集団生活の場で自然に起こり価値意識にも影響を与える。

(2) マサイ女性

マサイ女性から見た就学の効果（自身と不就学女性との日常生活における違い）は、次の①～⑰のとおりである。①スワヒリ語が流暢に使える、②英語ができる、③自由に交通機関を利用して移動できる、④料理がうまくでき、栄養バランスに気をつかう、⑤衛生的な生活が送れ、家の掃除をする、⑥子どもの健康に気を付けた世話ができる、⑦読み書きができ、メモが作れる、⑧計算ができる、⑨小規模なビジネスや農産物や家畜の売買ができる、⑩独立した行動ができ、夫に依存しない、⑪家計を任され、予算が立てられる、⑫友人がたくさんいる、⑬子どもの数は少なくて良い、これ以上いらない、⑭知らない人とでも会話ができる、⑮子どもが病気になれば、病院へ連れて行ける、⑯家畜を消毒したり、薬を与えたりできる、⑰夫と対等に会話ができる。

教師へのインタビュー結果に比べると、表現を変えながらも、ほぼ同じような項目が含まれている。その中で興味深い違いとして、マサイ女性へのインタビュー結果にだけ含まれる点は、①スワヒリ語が流暢に使える、②英語ができる、③自由に交通機関を利用して移動できる、⑧計算ができる、⑫友人がたくさんいる、である。女性自身にとっては、公用語（英語）や生活上必要になるスワヒリ語（国語）を習得できることが③の行動にもつながっている。また、⑫の友人がたくさんいると意識している理由は、学校での級友の存在も大きいが、少し変わった形での言語の問題とも関係している。マサイ女性は１人を除いて、全員が携帯電話を所有しており、テキストメッセージを送信したり、相手の電話番号を登録するためには、スワヒリ語などの文字を理解していなければ使いこなせないのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

①澤村　信英、山本　香、内海　成治、南スーダンにおける紛争後の初等教育と学校運営の実態―教授言語の変更に着目して―、比較教育学研究、査読有、50 巻、2015、112－133

②澤村　信英、山本　香、紛争後南スーダンのオルタナティブ教育－成人の学習意欲と社会背景－、国際教育協力論集、査読無、17 巻 1 号、2014、91－101
http://home.hiroshima-u.ac.jp/cice/?page_id=269

③野村　理絵、澤村　信英、ケニアにおけるマサイ女子生徒の学習動機―小学校教師の役割に着目して―、国際教育協力論集、査読有、16 巻 1 号、2013、1－15
http://home.hiroshima-u.ac.jp/cice/?page_id=269

④十田　麻衣、澤村　信英、ケニアの小学校における友人関係形成の役割―社会・文化的な背景から読み解く―、国際開発研究、査読有、22 巻 1 号、2013、23－38
http://jasid.org/journal/journal_backnumber/

⑤Sawamura, N., Utsumi, S., Sifuna, D., Primary Education Experience of a Maasai Women in Kenya: The long-term impact of schooling beyond subject knowledge, Africa-Asia University Dialogue for Educational Development –Final Report of Phase II Research Results- (2) Education Quality Improvement and Policy Effectiveness, *CICE Series*, Reviewed, 5, 2013, 1-9
http://home.hiroshima-u.ac.jp/cice/?page_id=3340

〔学会発表〕（計１０件）

① Sawamura, N. The Long-term Impact of Primary Schooling on the Lives of Maasai Women in Kenya. International Council of Education for Teaching, 59th World Assembly, 2015, Naruto University of Education, Japan.

②朝隈　芽生、イランにおけるアフガニスタン難民の教育、国際開発学会第 25 回全国大会、2014、千葉大学

②Sawamura, N. The Impact of Primary School Experience on the Lives of Maasai Women in Kenya. 9th Biennial Conference of the Comparative Education Society of Asia, 2014, Hangzhou Normal University, China.

③澤村　信英、山本　香、南スーダンにおける成人向けオルタナティブ教育の特質、第 14

回アフリカ教育研究フォーラム、2014、総合地球環境学研究所（京都）

④澤村　信英、南スーダンにおける学校運営と教師集団－ジュバ市内の小学校の現実－、第 50 回日本比較教育学会大会、2014、名古屋大学

⑤澤村　信英、野村　理絵、佐久間　茜、伊藤　瑞規、ケニアの小学生の就学環境と学習理由、第 13 回アフリカ教育研究フォーラム、2014、大阪大学

⑥澤村　信英、山本　香、南スーダン紛争後の学校運営と教師集団のリアリティ－ジュバ市内小学校の事例を中心に－、第 41 回アジア教育研究会、2013、大阪大学

⑦Sawamura, N. and de los Reyes, C. The Long-term Effect of Primary School Attendance on Maasai Women in Kenya, 12th UKFIET International Conference on Education and Training, 2013, Oxford University, UK

⑧澤村　信英、マサイ女性にとっての小学校教育の意味—ケニア・ナロック県の調査から—、日本アフリカ学会第 50 回学術大会、2013、東京大学

⑨澤村　信英、デロスレイエス　カルビン、ケニアの伝統的社会における小学校就学の価値—マサイ女性の生活から—、国際開発学会第 23 回全国大会、2012、神戸大学

⑩澤村　信英、マサイ女性にとっての学校教育の価値と効果－長期的な就学のインパクトを探る－、第 10 回アフリカ教育研究フォーラム、2012、神戸大学

〔図書〕（計　２件）
①澤村　信英　編、明石書店、アフリカの生活世界と学校教育、2014、280

②澤村　信英、内海成治　編、明石書店、ケニアの開発と教育—アフリカ教育研究のダイナミズム、2013、280

６．研究組織
(1)研究代表者
澤村　信英（SAWAMURA, Nobuhide）
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：３０２９４５９９

(2)研究分担者
デロスレイエス C（de los Reyes, Calvin）
大阪大学・大学院人間科学研究科・非常勤講師
研究者番号：　１０５９９２５２

中村　安秀（NAKAMURA, Yasuhide）
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：６０２６０４８６

(3)研究協力者
内海　成治（UTSUMI, Seiji）

十田　麻衣（TODA, Mai）

野村　理絵（NOMURA, Rie）

山本　香（YAMAMOTO, Kaoru）

朝隈　芽生（ASAKUMA, Mei）